

浦賀文化

第87号

令和8年10月1日発行

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

浦賀と下田【その一】



下田之図 (出典: 神奈川県立歴史博物館デジタルアーカイブ)

の監視をしていた。下田御番所(のちの下田奉行所)は設置されてから百年以上経過していたところで突然移転となった。

当時の史料では「港として適当ではないため」など

は浦賀奉行所の出張所で、遭難した船の処理や浦賀で改められなかった船の処理などを役割としていて、下田の海の支配を担っていた。このことから、移転後も下田との繋がりがあったことがわかる。

それから天保十三年(一八四二年)になると、江戸近海に來航する異国船への対策強化のため、羽田と下田に奉行所が設置されることになるが、これは下田奉行所の二度目の設置となる。この時には、当時二名いた浦賀奉行のうち、小笠原長毅が横滑り下田奉行となり、浦賀奉行は一時的に定員が一名となった。与力・同心が下田奉行所へ転勤することはなかったが、奉行所設置により下田御用所が廃止されたため、浦賀に全く影響がなかったわけではない。またこの時の下田奉行所は設置の上で何かと浦賀を模範としていたため浦賀奉行所とは兄弟のような関係にあったと言える。しかし、この下田奉行所は一年ほどで羽田奉行所とともに廃止、その後下田奉行であった土岐頼旨と羽田奉行であった田中勝行が横滑りで浦賀奉行に就任している。こうして浦賀奉行は二人制に戻り、下田御用所も復活し

てそれまで通りとなった。こうしてみると下田奉行所は、その歴史を通じて設置・廃止による役人の異動など浦賀奉行所には何かしらのかたちで影響を与えていたと言える。

ところで下田から浦賀へは役人だけではなく「下田問屋」と呼ばれた者たちも行き来していた。彼らは下田奉行所で「廻船問屋」として船改めを請け負っていた者たちで、全員で六三名いた。彼らは浦賀に奉行所が移転するときに船改めの実務経験を買われて浦賀にやってきたのであった。そして、新たに「廻船問屋」となった東西浦賀あわせて四一人とともに浦賀で船改めの業務にあたったのである。

このように、浦賀と下田の間には浦賀奉行所の同心や下田問屋といった人々の行き来も頻繁にあり、それ故にその歴史を通じて下田と浦賀は強い結びつきがあったと言えるだろう。

(山本 慧)

★参考文献

- ・「新横須賀市史 通史編 近世」
- ・「浦賀奉行所関係史料第三集 大砲鋳立場御用留・浦賀真秘録・松山源五郎文書・他」
- ・「浦賀奉行所関係史料集 新訂白井家文書 第一巻」

前号で下田奉行所にいた今西宏蔵について少しふれた。彼は元浦賀奉行所同心で、嘉永七年(一八五四年)三月に下田が開港場となり奉行所が設置されるとすぐに浦賀奉行所から転勤した人物である。和親条約の締結により下田が開港し下田奉行所の三度目の設置がされると、浦賀奉行所から支配組頭をはじめとした十数名が下田奉行所に転勤して実務にあたったが、今西はその内の一人であった。この出来事の前から実は浦賀と下田は歴史の中で縁があったのである。その縁をここで紐解いてみたい。

浦賀に奉行所ができたのは享保五年(一七二〇年)のことだったが、これより前は下田に番所があり、江戸を出入りする船

とされているだけで十分な説明はないが、近年では東廻り航路の発展に対応するためと言われている。奉行所の設置場所については当初、浦賀のうちでも東浦賀にとされていたが、住民の大反対があつて最終的には西浦賀の川間(現在の西浦賀五丁目・六丁目あたり)に決まった。こうして移転先が決定して引越しくになると、下田御番所の与力・同心も下田から浦賀に転居してくるようになった。つまり浦賀奉行所の与力・同心たちは遡ればそのルーツが下田にあった者たちだったというわけである。

下田には御番所に代わり「下田御用所」が置かれ、浦賀から同心二名が二ヶ月交代(のちに三ヶ月)で詰めていた。「御用所」

明治天皇行幸（中編） —観音崎砲台並びに横須賀造船所天覧—

この行幸に関しては、陸海軍の記録をはじめ多くの文書に記載があります。が、食い違いも見られるため、信憑性の高い情報を中心に作成しました。それでは、行幸の具体的な内容を時系列で紹介します。

○明治一四年五月一八日（水）晴れ
「午前七時三〇分」宮内卿・徳大寺實則、宮内大輔・杉孫七郎、侍従長・米田虎雄らを従えて赤坂仮皇居を御出門、馬車で新橋停車場へ。

行幸の際の行列を「鹵簿（ろぼ）」と言います。公式には警衛や儀仗を伴う壮大な隊列となりますが、この時は略式でした。なお、「赤坂仮皇居」とは、明治六年に皇居が焼失したため、明治二一年に新皇居が落成するまで天皇がお住まいになっていた場所で、現在の赤坂御用地にあたります。

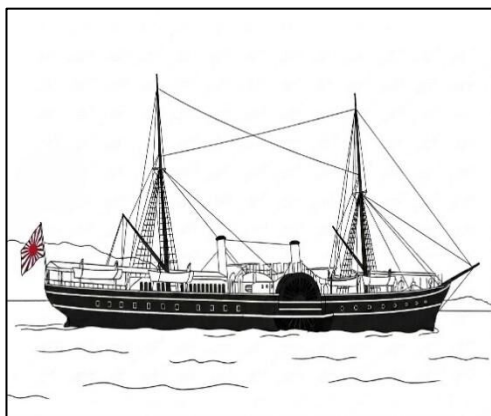
供奉（お供）は、宮内省関係者のほか、皇族から有栖川宮、東伏見宮、伏見宮、北白川宮（伏見宮と北白川宮は浦賀へ先着）。政界から右大臣・岩倉具視をはじめ、大隈重信、山縣有朋、西郷従道、山田顕義の四参議、軍から陸軍卿・大山巖、海軍卿・川村純義ら、錚々たる顔ぶれでした。この他にも多くの陸海軍人と騎馬隊が同行しました。

「午前八時一〇分」新橋停車場からお召し列車で横浜停車場へ移動。
鉄道は既に明治五年に開業しており、

所要時間は一時間弱のため、九時一〇分頃には到着されたでしょう。
横浜停車場からは馬車で東海鎮守府へ移動。

明治九年開設の東海鎮守府は、現在の「横浜ベイタワー」付近、横浜停車場は現在の桜木町駅付近にありました。なお、東海鎮守府は明治一七年に横須賀へ移り「横須賀鎮守府」となり、跡地は「横浜御用邸」として使用されています。

東海鎮守府の正門前では、各艦長や鎮守府員らが整列して奉迎し、鎮守府長官の先導により玉座へと進まれてご休憩されました。



「迅 鯨」

「午前九時二五分」鎮守府から端船で沖合に停泊中の「迅鯨（じんげい）」へご乗艦。

艦長が舷門で奉迎、士官が整列する中、軍楽隊の演奏に合わせて乗艦され、艦内をご巡覧になりました。

「迅鯨」は横須賀造船所で完成したばかりの豪華な設備を持つ御召艦です。因みに、のちの東郷平八郎元帥は当時少佐で、「迅鯨」の副長を務めていました。今回の行幸では護衛などの任にあたっていたものと考えられます。

「午前九時五〇分」抜錨出港。

横浜港内に停泊中の内外の艦船は満艦飾を施し、出港の際には礼砲が打たれ、登桁礼をもって見送りました。

供奉艦は、前が「扶桑」、後ろが「金剛」です。「迅鯨」はまず富津の洲に向かつて航行しました。途中、猿島沖で横浜港へ向けて帆走する「富士山艦」と遭遇し、同艦から祝砲が打たれました。これは偶然ではなく、あらかじめ計画されていた演出です。

富津の洲の近くで機関を止め、第一海堡の建設予定地を遠望されました。

この時、英国から輸入して横須賀造船所で組み立てたばかりの「第一号型水雷艇」が接近し、水雷の実験をご覧に入れました。更に、「迅鯨」の艦首に装備されたノルデンフェルト機関砲を発射。この砲は対水雷艇用に導入されたもので、その威力を実際にお見せしたのです。

航行を再開、昼食を艦内でお召し上がりになりました。

「一二時三〇分」無事に浦賀港に入港されました。

翌日の横須賀造船所行幸とあわせ、海軍側のこの積極的な取り組みを見ると、この機会を利用して天皇に海軍の現状や最新の軍備を認識していただくとしていたことがうかがえます。今回の行幸は、海軍にとっても自らの存在と近代化をアピールする絶好の機会だったといえるでしょう。

次回（後編）は、いよいよ観音崎の砲台建設現場の天覧と浦賀の町のお出迎えの様子をお届けします。

（デビット佐藤）

笑話一題

「身近な町でちょっと特別な一日」
浦賀に住んで三十年になります。が、わが家から歩いて一〇分程の場所にある浦賀渡船にはこれまでほとんど乗る機会がありませんでした。先日妹からの突然の提案で、ボンボン船に乗って叶神社巡りをしてきました。この日は八月初めにしては涼しい日で、気持ち良い潮風を感じながら船上からは見慣れた浦賀の町とはちよつと違った表情を眺め、ほんのひと時ではありますが、日常を離れたような心地良い時間を過ごしました。

船頭さんも親切な方で、年甲斐もなくはしやぐアラ還姉妹の写真撮影に協力して下さったり、船の近くを泳ぐ魚の美味しい食べ方などを教えて下さり心に残る一日となりました。子育てや介護も一段落し、これからは少し時間にゆとりができそうなので、「これを機に歴史深い浦賀の散策など一緒に楽しみたいね」と妹とも話が弾みました。

ぽじぶ

